

JP03/15751

PCT/JP03/15751

日 本 国 特 許 庁  
JAPAN PATENT OFFICE

09.12.03

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日  
Date of Application: 2002年12月19日

出 願 番 号  
Application Number: 特願2002-367779

[ST. 10/C]: [JP2002-367779]

出 願 人  
Applicant(s): 力丸 裕  
リオン株式会社

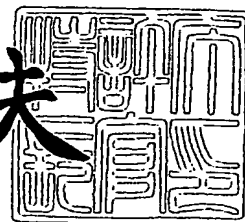
RECEIVED	
03 FEB 2004	
WIPO	PCT

PRIORITY DOCUMENT  
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN  
COMPLIANCE WITH  
RULE 17.1(a) OR (b)

2004年 1月16日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

今 井 康 夫



出証番号 出証特2003-3112135

【書類名】 特許願

【整理番号】 1157414015

【提出日】 平成14年12月19日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 A61B 10/00  
G06F 3/16

【発明者】

【住所又は居所】 京都市左京区高野東開町 1 - 7 - 1 2 - 5 0 5

【氏名】 力丸 裕

【特許出願人】

【識別番号】 502369768

【氏名又は名称】 力丸 裕

【代理人】

【識別番号】 100115749

【弁理士】

【氏名又は名称】 谷川 英和

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 165527

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 診断装置および診断方法

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 音声信号の少なくとも一部を帯域信号に分けて雑音化した劣化雑音音声信号を出力し、患者の回答を受け付け、当該回答により患者の症状を診断する診断方法。

【請求項 2】 音声信号の少なくとも一部を複数の帯域信号に分け、それぞれを雑音化した劣化雑音音声信号を出力し、患者の回答を受け付け、患者の症状を診断する診断方法。

【請求項 3】 前記出力した劣化雑音音声信号に対応する情報と前記回答をもとに、症状データベースを参照して症状を推定することを特徴とする請求項 1 または請求項 2 いずれかに記載の診断方法。

【請求項 4】 複数の帯域濾波手順を有する第 1 の帯域濾波手順により、音源信号の少なくとも一部から所定の帯域の帯域信号を抽出し、包絡線抽出手順により各帯域信号の包絡線を抽出し、複数の帯域濾波手順を有する第 2 の帯域濾波手順により、雑音源信号を前記所定の帯域に対応する帯域雑音信号とし、帯域信号と帯域雑音信号を乗算手順において乗算し、乗算手順によって得た出力を加算手順において累算して、音源信号の成分を雑音化した劣化雑音音声信号を作成するようにした請求項 1 または請求項 3 いずれかに記載の診断方法。

【請求項 5】 帯域信号を分ける帯域濾波手順の数、周波数帯域境界の周波数のうち少なくとも一方を、少なくとも言語によって変更できるようにした請求項 1 から請求項 3 いずれかに記載の診断方法。

【請求項 6】 帯域信号を分ける帯域濾波手順の数、周波数帯域境界の周波数のうち少なくとも一方を言語自動認識により変更できるようにした請求項 1 から請求項 3 いずれかに記載の診断方法。

【請求項 7】 音声信号の中から音声成分のみを抽出する音声信号抽出手順を有し、前記劣化雑音音声信号は、抽出した音声成分の少なくとも一部を劣化雑音音声信号としたものであることを特徴とする請求項 1 から請求項 6 いずれかに記載の診断方法。

【請求項 8】 請求項 1 から請求項 7 のいずれかに記載の方法を実行する診断装置。

【請求項 9】 コンピュータに、  
音声信号の少なくとも一部を帯域信号に分けて雑音化した劣化雑音音声信号を出力するステップと、  
患者の回答を受け付けるステップと、  
前記回答により患者の症状を診断するステップを実行させるためのプログラム。

【請求項 10】 コンピュータに、  
音声信号の少なくとも一部を複数の帯域信号に分け、それぞれを雑音化した劣化雑音音声信号を出力するステップと、  
患者の回答を受け付けるステップと、  
前記回答により患者の症状を診断するステップを実行させるためのプログラム。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、音声信号の少なくとも一部の帯域信号を雑音化した劣化雑音音声を使用した診断装置及びその方法に関し、特に、脳障害の疑いのある患者の障害の診断に適した装置及び方法に関する。

【0002】

【従来の技術】

従来、脳梗塞、脳出血などの可能性のある患者に対しては、X線によるCT断層撮影装置や、MRI（磁気共鳴画像）断層撮影装置、陽電子放射を利用したポジトロン診断装置などを使用して診断が行なわれている。

【0003】

一方、音声信号の認識研究において、音声信号をそのまま聞かずとも、音声信号の成分を所定の方法で雑音化しても、言葉をかなり認識できることが分かっている。かかる技術は、例えば、非特許文献1、非特許文献2、非特許文献3に記載されている。

【0004】

かかる文献によれば、音声信号を4つの周波数帯域（0～600、600～1500、1500～2500、2500～4000 Hz）に分けて、それぞれの音声信号を半波整流し、16 Hzのローパスフィルタにかけて、各周波数帯の振幅包絡をもとめ、各周波数帯域に対応したバンドノイズを掛け合わせた信号を足し合わせた信号を作成する。このような信号を劣化雑音音声という。劣化雑音音声を正常な聴力を有する被験者に聞かせたところ約80%の了解度が得られたことが報告されている。

#### 【0005】

##### 【非特許文献1】

Shannon, R.V., et.al, 「Speech Recognition with Primarily Temporal Cues」, SIENCE、1995年、270号、p. 303-305

##### 【非特許文献2】

小畑宣久、力丸裕「経時的振幅変化に着目した周波数成分劣化音声知覚の検討」日本音響学会聴覚研究会資料、1999年、H-99-6

##### 【非特許文献3】

小畑宣久、力丸裕「帯域雑音により合成された日本語音声の了解度－聴覚中枢新家の機能を利用したスピーチプロセッサを目指して－」日本音響学会聴覚研究会資料、2000年、H-2000-3

#### 【0006】

##### 【発明が解決しようとする課題】

従来、脳梗塞、脳出血など脳障害の可能性のある患者の症状の診断には、X線によるCT断層撮影装置や、MRI（磁気共鳴画像）断層撮影装置、陽電子放射を利用したポジトロン診断装置などが使用される。これらの装置は、脳の損傷部や病巣部を検出する有力な方法であるが、解剖学的障害部位の診断方法であり、機能の診断を行なうことは困難である。解剖学的な撮像だけでは不明瞭な機能診断を、大掛かりな装置によらず、簡便に行なう方法があれば、診断が行ない易くなる。また、老化による老人性難聴のような障害、先天聾、脳によらない聴覚障害などに対する診断装置も望まれていた。

#### 【0007】

**【課題を解決するための手段】**

上記の課題を解決するために、本発明の診断装置は、以下のような手段、手法を採用する。

**【0008】**

(1) 音声信号の少なくとも一部を単一又は複数の帯域信号に分けて雑音化した劣化雑音音声信号を患者に提示し、患者が認識した回答の内容と、提示刺激とを分析し、分析結果により患者の症状を診断するようにした診断装置とすることにより、患者の病状の判定や損傷部位の推定などの診断に役立つ。

**【0009】**

(2) 複数の帯域濾波手順を有する第1の帯域濾波手順により、音源信号の少なくとも一部から所定の帯域の帯域信号を抽出し、包絡線抽出手順により各帯域信号の包絡線を抽出し、複数の帯域濾波手順を有する第2の帯域濾波手順により、雑音源信号を上記所定の帯域に対応する帯域雑音信号とし、帯域信号と帯域雑音信号を乗算手順において乗算し、乗算手順によって得た出力を加算手順において累算して、音源信号の成分を雑音化した劣化雑音音声信号を作成するようにしている。帯域濾波器の数や帯域の周波数境界を選択したり、変更したりできるようにしておけば、種々の診断目的に使用することが可能になる。また、自動言語認識によって、その言語に適した帯域濾波器の数や帯域の周波数境界を選択したり、変更したりすれば、複数の国籍の人々に使用可能となり、外国人の診断にも使用できる。

**【0010】**

(3) 上記、診断装置は、コンピュータプログラムなどの手順として実行可能であるので、コンピュータに機能させるためのプログラムを記録した記録媒体やコンピュータに機能させるためのプログラムとしてよい。

**【0011】****【発明の実施の形態】**

以下、診断装置の実施形態について図面を参照して説明する。なお、実施の形態において同じ符号を付した構成要素は同様の動作を行うので、再度の説明を省略する場合がある。

## 【0012】

## (実施の形態1)

まず、劣化雑音音声信号の作成法とその診断に対する効用について説明する。図1は、本発明に使用する劣化雑音音声変換部のブロック図である。図1において、音声信号が、入力端子7を経て帯域濾波部1に印加される。帯域濾波部1は、所定の帯域の信号を抽出する複数の帯域濾波器1a、1b、1c、1dを有する。各帯域濾波器1a、1b、1c、1dの出力信号は、包絡線抽出部2の包絡線抽出器2a、2b、2c、2dにそれぞれ印加され各帯域信号の包絡線を抽出する。雑音源5の出力する雑音信号は、複数の帯域濾波器4a、4b、4c、4dを有する帯域濾波部4に印加され、帯域濾波部1と同様の周波数帯域を有する雑音信号に分波される。包絡線抽出器2a、2b、2c、2dと帯域濾波器4a、4b、4c、4dの出力は、乗算器3a、3b、3c、3dを有する乗算部3において、対応する帯域毎に乗算され乗算結果は、加算部6において累算され、出力端子8において出力信号となる。

## 【0013】

このようにして作成した劣化雑音音声を用いて、患者に聞かせ、認識した言葉や文章を調べてみると、患者の症状によって、その認識結果に特徴があることが分かった。脳梗塞、脳出血、老人性難聴、先天聾、脳によらない聴覚障害では、それぞれ認識結果に差がある。これは、劣化雑音音声化された音声信号を聴いて認識する際に使用する脳機能や使用する脳の部位が、通常の音声の場合とは異なるために、症状毎に特有の認識結果を示すものと推測される。本発明は、MR画像等と必要に応じて組み合わせることにより、このような現象を、精度の高い診断に活用するものである。

## 【0014】

図2は、本発明の劣化雑音音声を用いた診断装置のブロック図である。図2を用いて構成について説明する。診断プログラム記憶部21には、診断プログラムが組み込まれている。診断プログラムとは、たとえば、言葉や文章よりなる5種類の刺激を1組として、順次、1つずつ提示し、患者がその劣化雑音音声を用いて認識した5個の言葉や文章を認識結果として得、認識結果から患者の症状を推

測する一連の手順をプログラム化したものである。なお、刺激の種類は、5種類に限らず、1種類以上であればよい。診断プログラムには、患者に提示する刺激5個の識別コードとその提示手順が記憶されている。また、患者向けに診断手順や指示を表示するためのデータを記憶している。音源信号記憶部22には、診断用の種々の言葉や文章の音声信号が識別コードと対で記憶されている。劣化雑音音声変換部23は、図1で説明したものである。制御部20から入力される音声信号を劣化雑音音声信号に変換し、ヘッドフォン24に印加して劣化雑音音声信号を、ヘッドフォン24により患者に聞かせる。表示部25は、制御部20から与えられる、患者用の説明や指示のデータを、文字や図形で画面上に表示する。回答入力部26は、患者が劣化雑音音声聞いて認識した言葉や文章を入力するキーボードである。入力された回答は制御部20に入る。マイクロフォン27と音声認識装置28は、患者の音声による回答や反応を認識するもので、回答や反応は、制御部20に入る。回答分析部29は、収集した回答内容を分析し、分析結果を症状メモリ部30の症状データベースと対比して、症状を推測する。診断出力部31は、診断結果を出力するもので、プリンタやディスプレイである。

#### 【0015】

つぎに、本発明の診断装置の動作について説明する。

#### 【0016】

制御部20は、開始ボタンなどによる診断開始指示を検知すると、診断プログラム記憶部21から診断プログラムを読み出し、患者用の説明や指示データを、表示部25に渡して表示させる。つぎに、制御部20は、診断プログラムから提示すべき音源信号の識別コードを読み出し、この識別コードをもとに、音源信号部22から、指定された言葉や文章の音声信号を読み出して、劣化雑音音声変換部23に印加する。劣化雑音音声変換部23は、音声信号を劣化雑音音声に変換して、ヘッドフォン24により、患者に提示する。患者は、提示された刺激を聞いて認識した言葉や文章を、回答入力部26のキーボードに入力する。患者が受けた傷害などにより、患者自身が入力するのが困難な場合は、験者すなわち診断を行なうものが、患者の答えや反応を聞き、あるいは見て、入力する。制御部20は、入力された回答データを取り込み記憶する。制御部20は、提示した刺激

に対する回答を得たので、診断プログラム記憶部 21 の診断プログラムから、次に提示すべき指示データと音源信号の識別コードを読み出し、上記と同様の手順で、指示データを表示させ、刺激を提示させて、回答データを取り込み記憶し、次の刺激提示に進む。このようにして、5 個の刺激に対して得た 5 個の回答データを、制御部 20 は、回答分析部 29 に渡す。回答分析部 29 は、症状メモリ部 30 に記憶されている症状データベースを使用して回答内容を分析し、症状を推定し、推定症状データを制御部 20 に返す。制御部 20 は、推定症状名や症状データを診断出力部 31 から出力する。

#### 【0017】

つぎに、診断の仕組みを、モデル的に説明する。2 種類の刺激文章により、4 種類の症状を診断する場合で説明する。第一番目の刺激文章 A0 を「あめがふる（雨が降る。）」とする。この文章を劣化雑音音声化した信号を患者 P1 が聴いて、回答文章 A1 「あれがくる」の回答が得られたとする。A0 と A1 を比較すると、「め」、「ふ」が、それぞれ、「れ」、「く」と認識されている。母音としては正しいが、子音としては、誤っている。誤り方は、症状によって異なり、3 種類の症状に対して、回答文章 A1、A2、A3 をそれぞれ回答する。

#### 【0018】

2 番目の刺激文章 B0 「きょうはさむい（今日は寒い。）」に対する認識も、症状により、回答文章 B1 から B3 までである。

#### 【0019】

症状データベースには、刺激文章 A0 に対する各回答文章 A<sub>i</sub> (i = 1 ~ 3) と、刺激文章 B0 に対する各回答文章 B<sub>j</sub> (j = 1 ~ 3) による 9 通りの組み合わせに対して該当する症状名が 4 種類の中から割り振られた、対応表の形で格納されている。回答分析部 29 は、得られた回答 A<sub>i</sub> と B<sub>j</sub> をもとに、症状データベースを検索し、{A<sub>i</sub>、B<sub>j</sub>} に対応する症状名 S<sub>k</sub> (k = 1 ~ 4) を得る。

#### 【0020】

上記の例は、2 つの刺激文章に対する回答を入力関数として症状名を検索することにより、4 通りの症状が明確に判別できる例である。症状データベースの形式は、上記例に限らない。

## 【0021】

各刺激文章の中で誤った音節、モーラ、各音などの単位で、刺激音と回答音の変化対を、回答分析部29において分析し、この変化対の集合を入力関数として、症状データベースに入力して、症状名を検索するようにしてもよい。症状データベースには、変化対の集合に対する症状名の関連性を、多元関数の形で保有しておく。入力関数には、刺激文章又はその識別コードを含めてもよい。

## 【0022】

入力関数の要素としては、刺激文章、回答文章、それぞれの文章中の提示音（正解音）と回答音（誤り音）、音の単位としては、音節単位、モーラ単位、子音、母音単位などを適用できる。また、上記各要素と各症状名との相関性を表す値を数値化しておき、入力関数に対する相関値の総和や、総合的相関値を求め、相関値の大きいものから複数の症状名を選択して、相関値と共に出力するようにしてもよい。

## 【0023】

これらの症状データベースは、医師、言語治療士、言語聴覚士などが、多数の患者の診察経験を分析したり、適切な患者の母集団に対して刺激文章に対する回答を収集し、その結果を因子分析するなどの方法により、作成することができる。

なお、劣化雑音音声化しない音声信号に対しても、特定の文章で、症状に特有の回答が得られる場合は、このような文章を、診断プログラムに組み込み、上記データベースの構造内に組み込んでもよい。

## 【0024】

（実施の形態2）

上記説明では、5個の刺激を与えるステップを順番に進めるようにしたが、診断プログラムを2段階に分けて、第1段階で、基本的診断を行ない、その結果により、第2段階の詳細診断に移行するようにしてもよい。この場合は、回答分析部29が、基本的診断の結果を制御部20に渡すと、制御部20は、その結果をもとに、複数用意された第2段階の診断プログラムの中から一つを選択して第2段階の診断に移行する。

## 【0025】

## (実施の形態3)

なお、患者がキーボードから入力する代りに、マイクロフォン27から声で入力し、音声認識部28により、テキスト情報に変換して、制御部20に入力するようにしてもよい。

## 【0026】

## (実施の形態4)

劣化雑音音声変換部23の帯域濾波部1、4の各帯域濾波器の周波数帯域は、 $0\sim600\text{Hz}$ 、 $600\sim1500\text{Hz}$ 、 $1500\sim2500\text{Hz}$ 、 $2500\sim4000\text{Hz}$ を標準的なものとする。図3に示す劣化雑音音声変換部のように、帯域選択部12を設け、帯域濾波部1と4の上記各周波数帯域を切り替えることができるようにしてもよい。たとえば、周波数帯域の数を1、2、3、4の内から選択できる。これは、母音や子音の条件や、言葉によっては、4つの周波数帯域を必要としない場合があるからである。たとえば、帯域濾波器1c、1d、4c、4dの出力を0とすることにより、周波数帯域の数を2とすることができる。また、全部、あるいは任意の一部の帯域濾波器について、その周波数帯域の間の境界周波数を $600\text{Hz}$ 、 $1500\text{Hz}$ 、 $2500\text{Hz}$ 、 $4000\text{Hz}$ とは別の周波数に切換選択できる。 $600\text{Hz}$ 、 $1500\text{Hz}$ 、 $2500\text{Hz}$ 、 $4000\text{Hz}$ は、第1フォルマントと第2フォルマントによって、音声の母音、日本語では、/a/、/i/、/u/、/e/、/o/を分離する周波数境界の標準的なものに近い値である。しかし、この周波数境界は、個人によって少し異なっている場合がある。このような個人差に対応して、周波数帯域の境界を調整、変更することにより正確な診断を得られる場合があるので、このために切換選択できるようにしておく。周波数境界を4つより多くしてもよい。また、外国語では、母音の体系が日本語の場合とは異なるものがあるので、外国語に対応するように帯域濾波器の数や境界周波数を切り替えられるようにしてもよい。

## 【0027】

この帯域濾波器の数や境界周波数の変更は、診断プログラムに従って行なうようにしてもよい。また、症状データベースと連動して変更できるようにしてもよ

い。

### 【0028】

制御部20にマイクロフォンを接続し、医師や言語治療士、言語聴覚士等が、音源信号記憶部22にない言葉や文章を刺激として提示する場合もある。このような場合、マイクロフォンから周囲騒音が混入することがあるので、図3の劣化雑音音声変換部23のように、音声信号抽出部9を設けて、入力音声信号から音声成分だけを抽出して、帯域濾波部1に印加するようにしてもよい。音声成分を抽出するには、例えば、スペクトルサブトラクションのような手法で、入力音声信号に含まれる音声成分以外の周囲騒音を抑圧するような構成とする。

### 【0029】

外国語対応をする場合は、言語自動認識部を設けておき、患者や指導者が最初にマイクロフォン27に入力した言葉や文章を、音声認識部28により自動認識して、帯域選択部12が、その国の言葉に対応した帯域濾波器数と周波数帯域境界を、帯域濾波部1と4に設定し、その国の言葉による音声信号を使用し、その国の言葉に対応する症状データベースを使用するようにすればよい。

### 【0030】

上記周波数帯域の境界周波数を決定する方法として、発声された音声言語の周波数特性を分析してゆき、周波数成分の主要ピークが時間とともに推移してゆく変化を観測し、この変化のパターンから各フォルマントの移動を検知することにより、境界周波数を決めるようにすることができる。このようにすれば、診断者、すなわち、験者個人の発語の特徴に合致した境界周波数を使用することができる。なお、このような境界周波数の決定を、リアルタイムに行ないながら、劣化雑音音声変換を行なうようにしてもよい。外国語に対応した境界周波数を使用する場合にも、このような境界周波数決定法を使用することができる。

### 【0031】

(実施の形態5)

図2の診断装置の音源信号記憶部22に、あらかじめ音声信号を劣化雑音音声に変換した信号を記憶しておき、その出力信号をヘッドフォン24により、患者に聞かせるようにしてもよい。この場合は、劣化雑音音声変換部23は、なくと

もよい。

### 【0032】

#### (実施の形態6)

図6は、簡略化した診断装置のブロック図である。図6において、音源信号記憶部62は、刺激提示用の言葉や文章の音声信号データが記憶されている。制御部60は、診断者が、押しボタン（図示しない）を押すと、音源記憶部62から音声信号データを読み出し、劣化雑音音声変換部63に印加する。劣化雑音音声変換部63は、変換した劣化雑音音声信号を、ヘッドフォン63により患者に提示する。患者は、認識した言葉や文章を回答として診断者に口頭で伝える。診断者は、回答を書き留め、回答結果から、症状を推定する。診断者は、マイクロフォン67から、刺激提示用の言葉や文章を口頭で話し、制御部60が、その音声データを劣化雑音音声変換部63、ヘッドフォン64を通じて、患者に提示するようにしてもよい。この場合、（実施の形態4）において説明したように、周波数帯域の境界周波数を決定する方法として、発声された音声の周波数特性を分析してゆき、周波数成分の主要ピークが時間とともに推移してゆく変化を観測し、この変化のパターンから各フォルマントの移動を検知することにより、境界周波数を決めるようにしてもよい。このようにすれば、診断者、すなわち、験者個人の発語の特徴に合致した境界周波数を使用することができる。

なお、診断者が、マイクロフォン67を通じて、口頭で患者に指示を行なう場合は、劣化雑音音声変換部63をバイパスする伝送路を設けてもよい。また、音源信号記憶部62に劣化雑音音声信号を記憶する場合は、劣化雑音音声変換部63を省いてもよい。

### 【0033】

#### (実施の形態7)

以下、診断方法の実施の形態について説明する。まず、劣化雑音音声の変換方法について説明する。図4は、劣化雑音音声変換方法のフローチャートの一例である。劣化雑音音声変換の手順（S100）は、（S10）～（S15）の手順により構成される。

### 【0034】

まず、帯域選択手順（S10）において、以降の帯域濾波手順（S11）と（S13）が行なう帯域濾波の帯域周波数の数や帯域周波数の境界周波数の変更や設定を必要に応じて行なう。この手順は、診断者の操作がある場合や診断プログラムから指示がある場合に実行する。操作や指示が無ければこの手順を飛ばす。次に、帯域濾波手順（S11）において、設定された帯域濾波の帯域周波数の数や帯域周波数の境界周波数にもとづいて、入力音声データを濾波し、帯域音声データを得る。濾波音声データから、包絡抽出手順（S12）において、その包絡成分データが抽出される。次に、帯域濾波手順（S13）において、ホワイトノイズの雑音信号を、上記設定された帯域濾波の帯域周波数の数や帯域周波数の境界周波数にしたがって濾波し、帯域雑音信号データを生成する。包絡成分データと帯域雑音信号データは、つぎの乗算手順（S14）において乗算され、乗算結果が複数の帯域分ある場合は、加算手順（S15）において累算する。累算した音声データは、劣化雑音音声データである。これを、DA変換しアナログ音声信号としてヘッドフォンより患者に提示する。

#### 【0035】

（S10）～（S15）の各手順は、図4のように順次実行してもよいし、それぞれ並列的に実行してもよい。それらの手順は、デジタル信号プロセッサ（DSP）のプログラムの形式で実現できる。

#### 【0036】

つぎに、診断方法の実施の形態について説明する。図5は、本発明の診断装置の機能を実現する手順のフローチャートの一例である。

#### 【0037】

診断プログラムをスタートさせると、指示提示手順（S20）において、診断プログラムから患者に対する指示情報を読みだし、表示装置25に表示する。つぎに、識別コード読取手順（S21）において、診断プログラムから、提示すべき言葉や文章の音声信号の識別コードを読み出す。音声信号選択手順（S22）において、識別コードに従って音源信号記憶部22から言葉や文章の音声信号を選択し、読み出す。読み出した音声信号を、先に説明した、劣化雑音音声変換手順（S100）において、劣化雑音音声データに変換する。つぎに、刺激提示手

順（S23）において、劣化雑音音声データをアナログの音声信号に変換してヘッドフォンにより、患者に刺激として提示する。患者が、劣化雑音音声を聴いて認識した内容を入力すると、回答記憶手順（S24）において、診断装置は、入力された回答データを記憶する。終了判定手順（S25）において、一連の刺激提示が終了したかどうかを、診断プログラムに確認し、NOであれば、（S20）に戻り、次の刺激提示に移行する。この手順を順次繰り返せば、一連の設問から成る一組の診断プログラムメニューが実行できる。終了判定手順（S25）において、YESであれば、一組の刺激列によるテストが終わったので、回答分析手順（S26）に移る。ここで、回答結果と症状データベースとにより、患者の症状の判定や、中間判定が行なわれる。これまでの回答分析の結果により、更に次の診断を続行する場合は、分析結果判定手順（S27）においてNOとなり、指示提示手順（S20）に戻り、続く診断プログラムの進行に移る。分析結果判定手順（S27）においてYESであれば、診断結果が出たので、診断出力手順（S28）において、その推定症状や関連するデータなどをプリンタや診断者用のディスプレイなどに出力し、診断を終わる。

#### 【0038】

ここで用いる刺激文章、回答文章、症状データベースなどは、（実施の形態1）において説明したものと同様である。

#### 【0039】

（実施の形態8）

難聴者を診断する場合は、ある周波数帯域の感度が落ちている場合などでは、その周波数に対する感度低下の特性を補償するような周波数特性を、各帯域濾波器の周波数特性に持たせるようにすればよい。図1では、4つの周波数帯域の音声信号をすべて帯域雑音信号に置き換えたが、一部の周波数帯域の音声信号は乗算部3に加えずに、直接加算器6に加えるようにして、音声信号成分を残してもよい。音声信号成分を残す周波数帯域に対しても、聴力障害の周波数特性やダイナミックレンジの劣化に対応した、それぞれの補正を行なってもよい。

#### 【0040】

なお、上記実施例では、帯域濾波部1、2の帯域濾波器の数を、典型例として

4 個としたが、その数は、4 個に限定されるものではなく、4 個以下、以上でもよく、その時々に必要なに応じた帯域数で実施すればよい。

#### 【0041】

なお、本発明の診断方法手順のプログラムを記録した記録媒体は、プログラムを記録したROM、RAM、フレキシブルディスク、CD-ROM、DVD、メモ리카ード、ハードディスクなどの記録媒体をいう。また、電話回線、搬送路などの通信媒体も含む概念である。本発明の診断方法手順のプログラムを記録したCD-ROMや症状データベースを記憶したCD-ROMをパソコンに装着することにより、パソコンを本発明の診断装置とすることができる。また、本発明の診断方法手順のプログラムを、電話回線などを通じてパソコンに取り込み、回答収集結果を、遠隔地にある症状データベースセンターに送り、症状の判定結果をセンターから入手し出力するようにしてもよい。

#### 【0042】

##### 【発明の効果】

以上のように、本発明によれば、通常音声を劣化雑音音声に変換した刺激を患者に提示し、その回答を分析することにより、種々の原因による聴覚障害の症状を診断することができる。

#### 【0043】

また、本発明の診断装置は、大掛かりな設備なしに、簡単に実現できる。

##### 【図面の簡単な説明】

##### 【図1】

本発明の一実施形態に使用する劣化雑音音声変換部のブロック図

##### 【図2】

本発明の一実施形態による診断装置のブロック図

##### 【図3】

本発明の一実施形態に使用する劣化雑音音声変換部のブロック図

##### 【図4】

本発明の一実施形態による劣化雑音音声変換部の動作を示すフローチャート

##### 【図5】

本発明の一実施形態による診断装置の動作を示すフローチャート

【図 6】

本発明の一実施形態による診断装置のブロック図

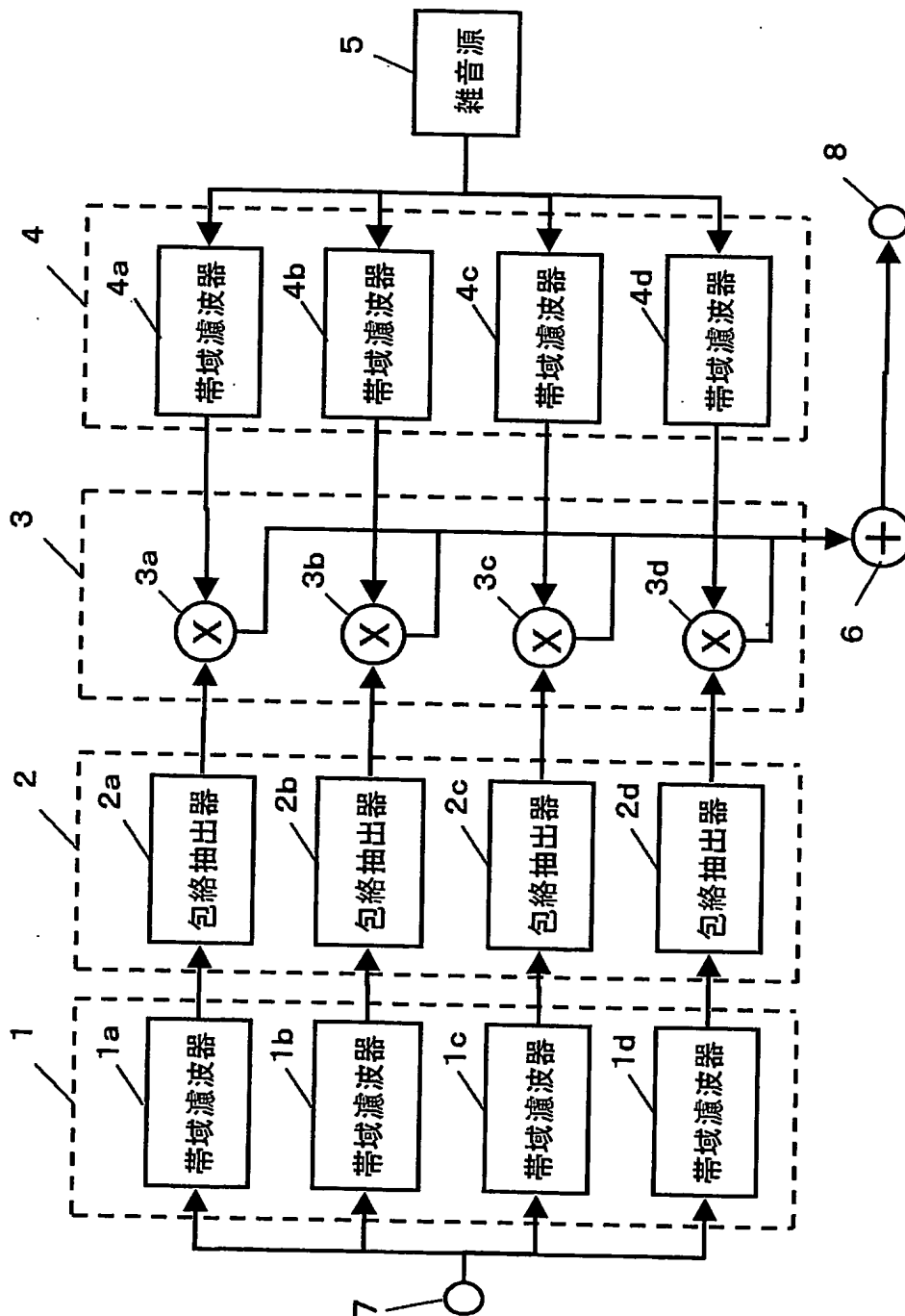
【符号の説明】

- 1、4 帯域濾波部
- 2 包絡抽出部
- 3 乗算部
- 5 雑音源
- 6 加算部
- 7 入力端子
- 8 出力端子
- 20 制御部
- 21 診断プログラム記憶部
- 22 音源信号記憶部
- 23 劣化雑音音声変換部
- 24 ヘッドフォン
- 25 表示部
- 26 回答入力部
- 29 回答分析部
- 30 症状メモリ部
- 31 診断出力部

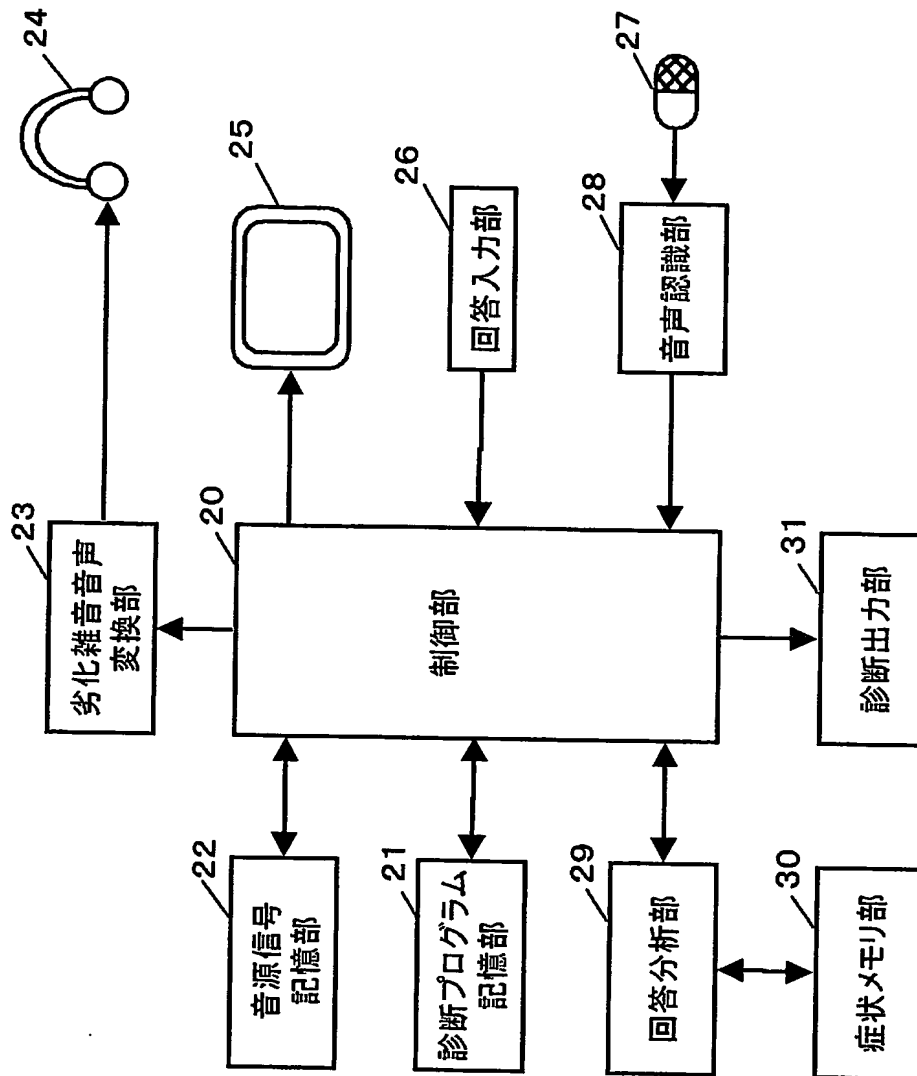
【書類名】

図面

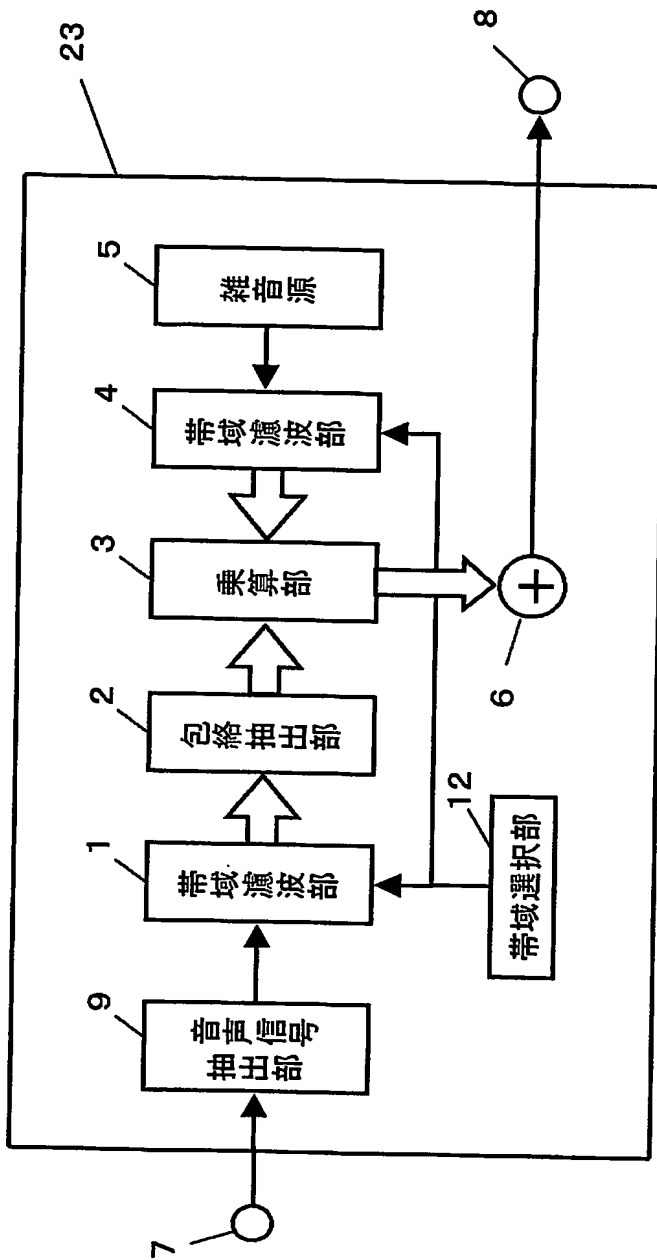
【図 1】



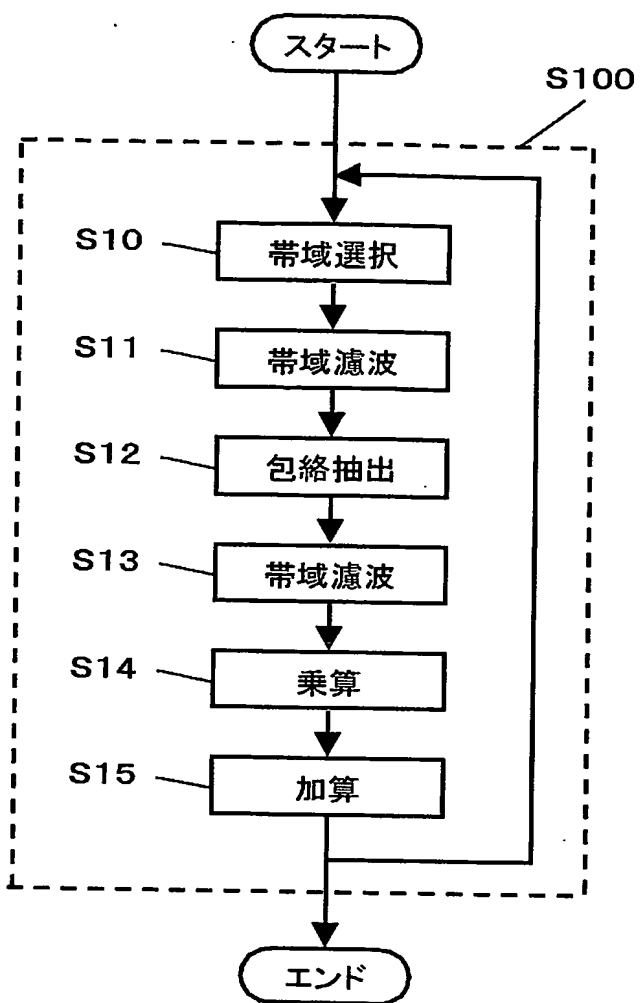
【図 2】



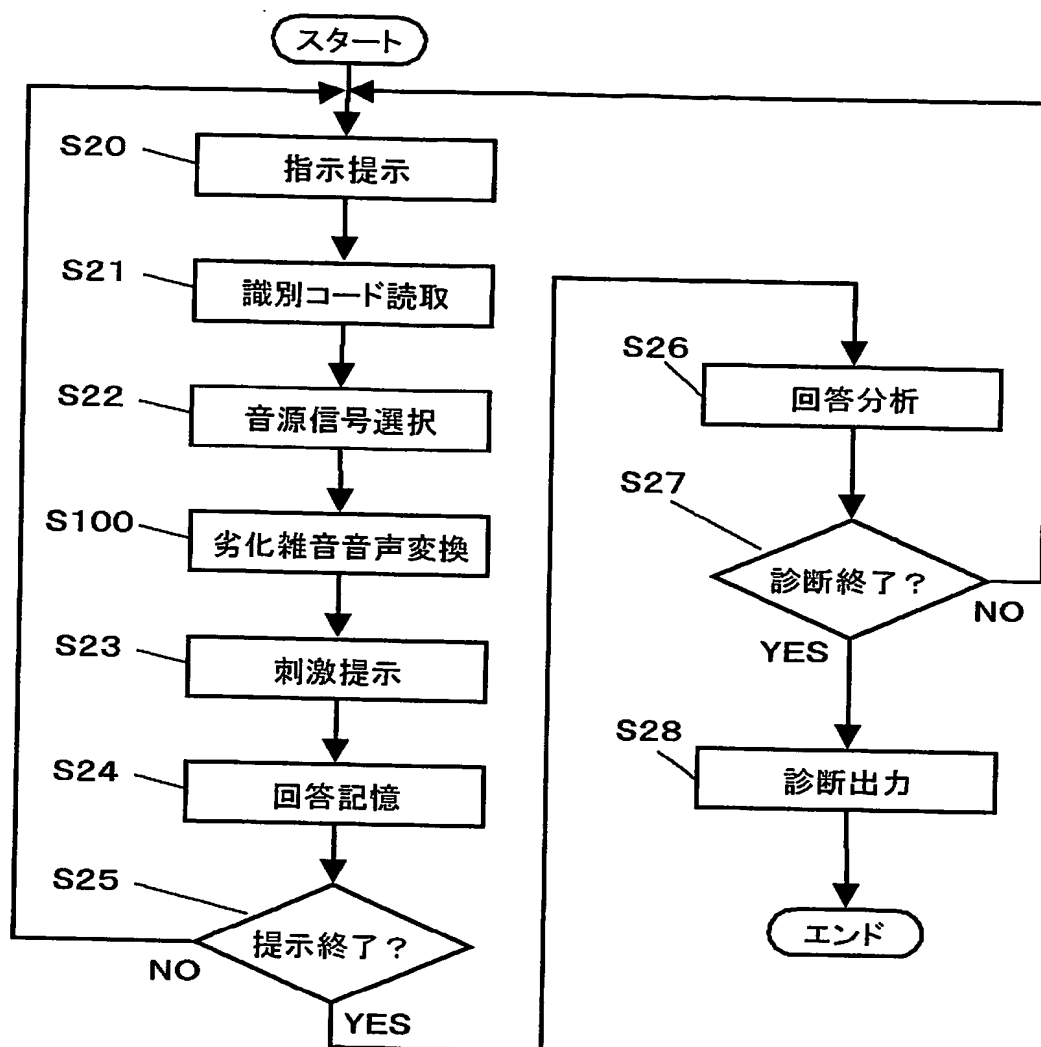
【図 3】



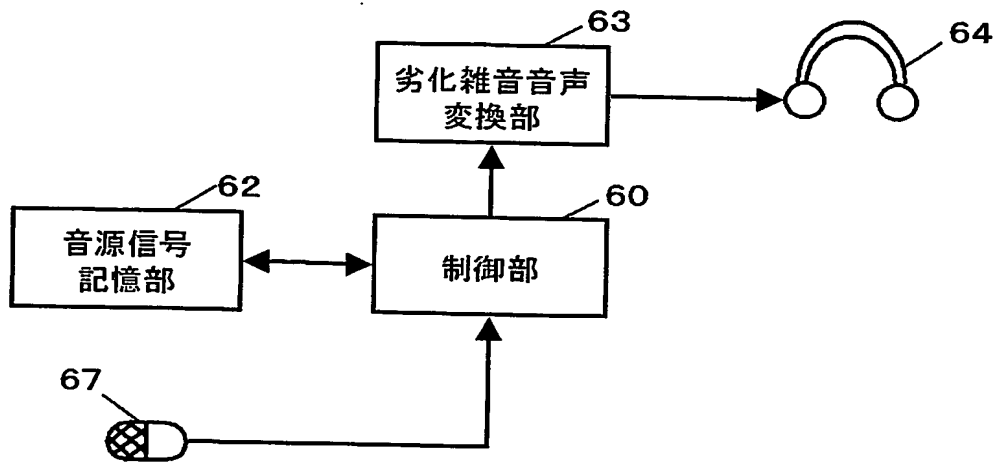
【図 4】



【図 5】



【図 6】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 X線によるCT断層撮影装置や、MRI（磁気共鳴画像）断層撮影装置、陽電子放射を利用したポジトロン診断装置などは、脳の損傷部や病巣部を検出する有力な方法であるが、解剖学的障害部位の診断方法であり、機能の診断を行なうことは困難である。

【解決手段】 上記の課題を解決するために、音声信号の少なくとも一部を単一又は複数の帯域信号に分けて雑音化した劣化雑音音声信号を患者に提示し、患者が認識した回答の内容と、提示刺激とを分析し、分析結果により患者の症状を診断するようにした診断装置とすることにより、患者の病状の判定や損傷部位の推定などの診断を行うことができる。

【選択図】 図 1

【書類名】 出願人名義変更届  
【提出日】 平成15年 9月 8日  
【あて先】 特許庁長官 殿  
【事件の表示】  
【出願番号】 特願2002-367779  
【承継人】  
【識別番号】 000115636  
【氏名又は名称】 リオン株式会社  
【承継人代理人】  
【識別番号】 100115749  
【弁理士】  
【氏名又は名称】 谷川 英和  
【譲渡人】  
【識別番号】 502369768  
【氏名又は名称】 力丸 裕  
【譲渡人代理人】  
【識別番号】 100115749  
【弁理士】  
【氏名又は名称】 谷川 英和  
【手数料の表示】  
【予納台帳番号】 165527  
【納付金額】 4,200円  
【提出物件の目録】  
【物件名】 譲渡証書 1

【物件名】

譲渡証書

【添付書類】

098

譲 渡 証 書

平成15年8月20日

住所 東京都国分寺市東元町3丁目20番41号  
譲受人 リオン株式会社  
代表取締役社長 井上 清恒 殿

住所 京都市左京区高野東開町1-7-12-505  
譲渡人 力丸 裕

下記の発明に関する特許を受ける権利の一部を貴殿に譲渡したことに相違ありません。

- 記
- |           |               |
|-----------|---------------|
| 1 特許出願の番号 | 特願2002-367779 |
| 2 発明の名称   | 診断装置および診断方法   |

以上

## 認定・付加情報

特許出願の番号	特願 2002-367779
受付番号	20301710098
書類名	出願人名義変更届
担当官	北原 良子 2413
作成日	平成 15 年 11 月 26 日

## &lt;認定情報・付加情報&gt;

## 【承継人】

【識別番号】	000115636
【住所又は居所】	東京都国分寺市東元町 3 丁目 20 番 41 号
【氏名又は名称】	リオン株式会社

## 【承継人代理人】

申請人

【識別番号】	100115749
【住所又は居所】	大阪府大阪市中央区大手前 1 丁目 7-31 OM Mビル 8 階 私書箱 53 号

【氏名又は名称】	谷川 英和
----------	-------

## 【譲渡人】

【識別番号】	502369768
【住所又は居所】	京都府京都市左京区高野東開町 1-7-12-5 05

【氏名又は名称】	力丸 裕
----------	------

## 【譲渡人代理人】

【識別番号】	100115749
【住所又は居所】	大阪府大阪市中央区大手前 1 丁目 7-31 OM Mビル 8 階 私書箱 53 号

【氏名又は名称】	谷川 英和
----------	-------

## 【提出された物件の記事】

【提出物件名】	譲渡証書 1
---------	--------

特願 2002-367779

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[502369768]

1. 変更年月日  
[変更理由]

2002年10月10日

新規登録

住 所  
氏 名

京都府京都市左京区高野東開町1-7-12-505  
力丸 裕

特願 2 0 0 2 - 3 6 7 7 7 9

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[ 0 0 0 1 1 5 6 3 6 ]

1. 変更年月日  
[変更理由]  
住 所  
氏 名

1 9 9 0 年 8 月 1 7 日  
新規登録  
東京都国分寺市東元町 3 丁目 2 0 番 4 1 号  
リオン株式会社